

## 『アンナ・カレーニナ』

私のロシア文学への愛は、ロシア三部作のバレエへと繋がった。

チエーホフ、プーシキン、トルストイの演劇、詩、小説は、ロシアの人々の様々な社会、文化、政治的状況を描写している。だが、そうした作品の登場人物たちにダンス生命を与えるよう私を突き動かしたのは常に、この偉大な作家たちの見つめる人間性と正義の、普遍性と不朽性だった。アンナ・カレーニナは今日の女性だ。

## 『椿姫』

私にとりダンスは、無限の愛の形を理想的に表現する手段でもあった—アルマンとマルグリットのような愛—『椿姫』

## 『クリスマス・オラトリオ I - VI』

ダンスは人間の様々な特性や側面のすべてを、余すことなく映し出す芸術であると私は思う。ダンスは、単なる娯楽でも、気晴らしでも、身体的能力や妙技を見せるためだけのものでもない。ダンスとは、人間の魂、精神の深み、そして究極の望み—すなわち、神との関係—さらには、我々が抱く疑念、不安、そして信仰の歓びとエクスタシーさえも映し出す。

## —第2部—

### 『ニジンスキイ』

ダンスの歴史は、私にとって常に生きたものだ—私以前にダンスの世界を形作ってきた人々、ダンサーや、後世に残るステップを作り、私を今いる場所へと導いてくれた振付家たちに、ずっと心惹かれてきた。

魅力的で勇敢で、個性的な舞踊史上の人々...とりわけ異彩を放つのは、ヴァスラフ・ニジンスキイだ。ダンサー、振付家、画家、人道主義者であったニジンスキイという人間は—子供の私の想像力に火を点け—靈感を与え、ダンサーたちを動かすよう、私を焚き付けた。私のバレエ『ニジンスキイ』は、1919年1月19日スイス、サンモリツのスヴレッタ・ハウス・ホテルでのニジンスキイ最後の公演で幕を開ける。

この最後のダンスの間、ニジンスキイの脳裏には、華やかだが波乱万丈で悲劇的だった己の人生のさまざまな像が現れる。そこへ、第一次世界大戦の恐怖、兄スタニスラフの狂気、そして自らの革命的な振付が混じりあう。

### 『ゴースト・ライト』

創造性は、私のダンスになくてはならないもの—私の世界に不可欠だった。苦難の時にも—このコロナ禍においても。感染が始まって間もなく、私は、バレエ団とともに新作を創ることがとても大事だと思った。窓を開け、少人数のダンサーたちごとに短く区切られたりハーサルを重ね、2020年の最初のロックダウン期間に新作を創った。『ゴースト・ライト』と名付けた。

『ゴースト・ライト』と名付けたのは、米国の劇場で、リハーサルや公演が終わったステージには、電球が一つだけついた鉄のスタンドが置かれるという習慣にちなんだ。教会の中の永遠の光のように、命がステージに戻るまで、電球は夜通し灯される。

日本の伝統芸能—歌舞伎、文楽、とりわけ能楽は、ずっと、私のインスピレーションであり続けた。私の作品への能の影響はきわめて深く、しばしば無意識に現れるほどだ。実際—作品が完成して初めて—『ゴースト・ライト』のワンシーンが、実は、モダンな能バレエであることに気づいた...

### 『作品100—モーリスのために』

ダンスの世界で生きてきた間には素晴らしい人々、偉大な芸術家と出会い、共に仕事をしてきた。その中には、大切な友人となった人もある。すでに何人かを亡くした。

しかし彼らの思い出と、彼らが与えてくれたインスピレーションは、今も私の仕事の中に、私の世界に、息づいている。偉大な振付家であり友人だったモーリス・ベジャールも、私が彼の70歳の誕生日のお祝いに創った作品の中で生きている。

私の世界はダンス—そして自分がその一部であることを、常に光栄に思ってきた—勤勉が強く求められる世界—栄光もあれば、挫折もある—魅惑と、献身と、たゆまない無条件の専心の世界。

このダンスの世界を、私は負担に感じたこともなく、この芸術が私に犠牲を強いていると感じたこともない。ダンスは、愛ゆえの仕事だ。

### 『マーラー交響曲第3番』

ダンスの世界に生きる日ごとに、私はグスタフ・マーラーの交響曲第3番の最終楽章のタイトルを思い出す、「愛が私に語りかけるもの」。